



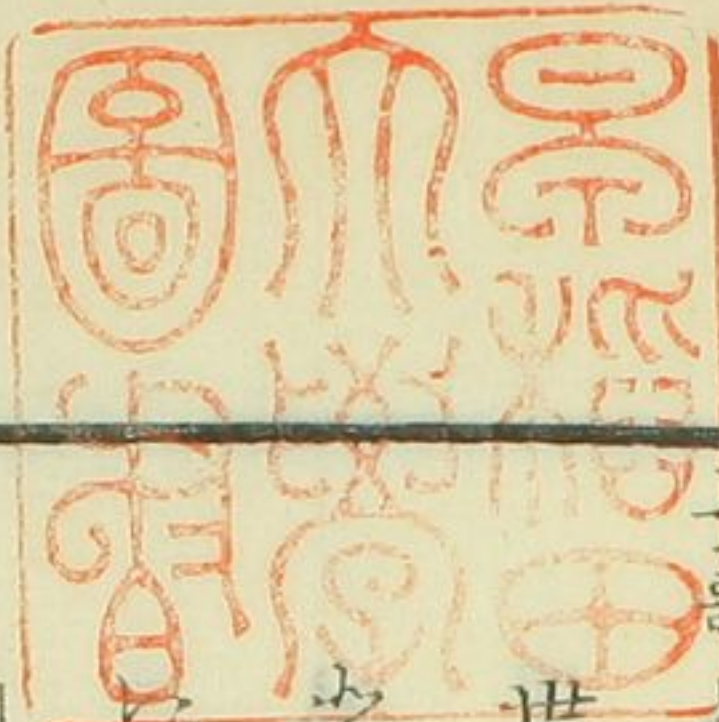
長歌撰格

下

4  
655  
2



門 剎  
號 655  
卷 2



長歌授格下

世に名を得る人々の歌を擧て其よとあつさをいへるをい  
やほるすしわわとあつとをいへる為ふハ止事を得きてあり既  
上巻の古事記書紀萬葉集の歌とを擧て其正志よめやつ風  
調句格をいへる次に古今集以下中古の歌を擧へるはすかか  
も引て其わつとをいへるをいへる遠く世の歌とをいへる上  
のふとをいへるといふてといふすれハ昔ハむす今ハ今ありれと  
いふまハ今世の歌をいへる引出て必きつ然るまか事とま  
のありりまハやあふ示さむやつれり其まふ今世の人との  
ありさすを見り先園珠庵の阿闍梨縣居の老翁などのいり  
まふふを本とて南西の國の人多し本居荒本甲の翁  
などの流をいへる東北の國の人ハ大かち千蔭春海主とのい

明治廿六年  
十月廿五日  
購未

ちつよにあらうてとむゆ舟を直にその頼もる人への歌と  
 もてきへむかへ再近くよく心よりあんとてつてきへと  
 ふらふきあふせし海ありかゝて其人等のうゝをさくは  
 やく其家集ともなり引置されしにきり刊行あらはるるか多く  
 半ハ寫本ハ中あそいと之志もあひなれハなへて人の手  
 近く引合せ見む便ふもとてこゝ世に普く行はるる菅根  
 集 此書ハ契沖真淵以来古学者の家集を普く輯て其中  
 より宜きをとてたに清水濱臣撰て刊行せし書也の張數に  
 改め直志て出志つり此丁數の前後入す まづるもあふを見  
 て殊更ふけすかゝのありぬ歌をそり出て云やうふも足ゆ  
 りれと然れきあふは大可の歌のすかゝハ姿として先一物  
 に出し其次ハ皆其人への歌の中にも殊に宜しとて時に譽れ  
 是れありつるをむむと抜出てさきまる所あり彼丁數の前後入す

夏つるハたゞ其歌どもの種類にあられてさかへこへも入ま  
 たり又家集と菅根集と其卷のたゞへはふ因てありされら其  
 本集を足ん人ハおけつりら知へたをのそゝに先近世の大人  
 へちけ常ふもけらやまてりは所の其大方のけらさるる

菅根集ハ丁宣長

あまぐらけ 秋後山ゆの まるまの まのまけ けりをもー せむおめて  
 めつらぬの 冬ふやりの 川のさる 磯のう人を くららま ありのけりハ  
 うはらぬの 春ふゆの ちまのまに けらけらぬ けらけらぬ せむー せむ  
 人へのまき 夏ふらけの はやむとを なるのまけ きんくさ けりけり  
 そのまふけ 秋ふゆの まのまの まのまの かくまも せむまの  
 くららぬ けらけらぬ けらけらぬ けらけらぬ せむまの  
 いせんま せんま せんま せんま せんま せんま









Handwritten musical notation on a single staff, consisting of a series of rhythmic notes and rests.

三三

十丁 宣長

Multiple staves of handwritten musical notation, including a vocal line and a piano accompaniment line with chords and rhythmic markings.

三三

九十一 同

Multiple staves of handwritten musical notation, similar to the previous page, with a vocal line and piano accompaniment.

はたしむし... 此人の... 限らぬと... 殊に多くせぬ... 中より一二つを引て... 其の... 詞... 世... 後世の... 浄瑠璃の... 行や... け... して...







ちのさかしく ちのさかしく ちのさかしく ちのさかしく  
 人のさかしく 「二百七言」 人のさかしく 人のさかしく 人のさかしく  
 かさねる人 又さねる人 「百五言」 又さねる人 又さねる人  
 このさかしく 都のさかしく 「百五言」 都のさかしく 都のさかしく  
 志のさかしく 志のさかしく 志のさかしく 志のさかしく  
 時くふ 時くふ 時くふ 時くふ  
「三句」 時のさかしく 時のさかしく 時のさかしく 時のさかしく  
 危そめくさき 「三句」 危そめくさき 危そめくさき 危そめくさき  
 此翁の歌に局きて然るふさかしく 千陰春海其他の人この歌に  
 恒多かるふ前後ふ引る歌ともみてもかつく見へたあり  
 今ハ例の多かる中より一二を引出て其大方を知さる也又一首  
 此起句より打つけし其事を打出てよめるふさかしく

百廿六丁 宣長 富士山寺

おちのく さかしく ちのさかしく ちのさかしく  
 ちのさかしく ちのさかしく ちのさかしく ちのさかしく  
 ちのさかしく ちのさかしく ちのさかしく ちのさかしく

百八十六 同 悼道麻呂

いぬかき ちのさかしく ちのさかしく ちのさかしく  
 ちのさかしく ちのさかしく ちのさかしく ちのさかしく  
 ちのさかしく ちのさかしく ちのさかしく ちのさかしく

此類のふさかしく ちのさかしく ちのさかしく ちのさかしく  
 ちのさかしく ちのさかしく ちのさかしく ちのさかしく  
 ちのさかしく ちのさかしく ちのさかしく ちのさかしく  
 事やはあはむ ちのさかしく ちのさかしく ちのさかしく



も然らざるにせは今やいとむも同一事あれとこそらば  
わぬしをけりやいふ一の則を守りあかしく長歌の句格に  
みいふくを用せむといふもかゝるれあきや猶申さば古  
代より禮樂を人をやハ一とといへども今ハ樂あつて無用  
に物あれハ古風の物よりもさけり世俗の再に入安は俳優  
に於て用せむといふも似れど猶今も朝廷に於てこれをら  
きひ傳へて貴み給ひ内侍所伊勢石清水をけり諸の皇神を慰  
め奉はし其樂を用せ給へるにあはれや又服ハりや寒暑成凌く  
に只ハ物あるを是も專いふ志ハ製をりて礼服と給ち又  
其製ハ尊卑によりてこそ人の級等を分ち給ふなり然るに今  
下さまにけり服をさる事ありとて其みとそむを又て誰か貴み  
めてさる歌もそれあやうにてけりあて野こそ言とれ

れる世にけり子こそ手ふりをさるはく調ふる故ふこそあ  
あまの身に志もよこそハあまの國を安らうん方ハ我  
として今の俗耳をちのまもあは常に枕辞比喻序辞發語助  
語等も以て高は歌をまもあまのくふ取るとかへハけり  
らかた俗言もておほふも志くハくねとそけいやはさきをは  
りのうはせむ遠き他の國に詩字此處ふしてすねい作るに  
くは韻字平仄起承轉合如と云類の定まる則を守りその法  
くふあまのち僻事をいふもあまの神代まらけり我  
皇國に歌の規則を守りとの教へあるをや如と云にけり  
へもさるけり此人を編撰太平御記ハさるけり  
ゆゑかかきとてハさるけり  
あハ一の歌文章に疊句多かるるち又て何の心もせけり  
まよふ重ねあきる例の多かり

五十九丁 宣長

はくすの 鈴の 鈴の 鈴の 丸木屋の

八十丁 同

あーちの みつたの 園の 園の

ろき 園の 園の

同丁 同

秋つま やまの 園の 園の

さむつや めろりの かーちの 志の 志の

二丁

七十六丁 同

あーね乃 地の 園の 園の

七十八丁 同

ろつぎみの 志の 志の

大を 志の 志の

志の 志の 全一首也

かくつそ疊句と云きのあはれ只いひつに言れ重複をば  
めけねまそれあそはそく煩はく其拙は事いとむかひま  
あーへま くれ又此篇の秋みあもあうまれ 今此授格に疊句  
や云き言の重きををいひと云ふも非を連今に文ありて程入る  
志よくいひ入る言ふちのうそはめて調へけつまかへん所を  
そめて貴ふまハ有るそは平言あふハはるそ志まも懐中を  
志よ事又心いらおのぢうはくそゆあをハつのみ侍くがごと大  
聲あふあや志つ烈志くもにくそあそ突入ていひつへ歌を  
聲うはけくそふ物あをれハさるむくはなれ大音も何々

後悪うれる言やう出て、拙といひ出はる言の類ひありぬハ事  
 の切好い時ややハ、うけ大音聲の代りに言らりかへてあひの  
 きし人をやまはらき切りのある船りさて志す大聲にあらか  
 きく、いひ烈まはるたふ志うて知もかりやさしくみやまうり  
 くのうふ、あはハ、同一言を重ね云にも、そのうらうはさか  
 らきてあはるへううは、若しれをわろくすさねもゆう言吃  
 家人の物いひ、聞らぬあひれむりけややくはさういふ  
 心せは志す、今も里後の人にも、猶此世あるま受つてうれさ  
 かうつす、そ事も繰返しては、也、又かの疊句對句あど、  
 偏重に置る事常多し、片違とは一聯に相並へる句とり右行也、  
 左行と詞のうりお、語して、いつきか一方應せぬ所はる志はる  
 をいふ、即次にし出を歌りの傍に、如此批点を加へて、その

應せぬ所を知るありそのさまといは

五十一丁 真洞

あつされる、さのみとて、百千里、家ちれぬ

さうらう、六尺ゆれと、ちまのぼろ、あひのなを

やせあつら、船りて、かちんは、心をちりぬ

さうらう、家ちれぬ、云て下六句略之は單句也

四十七丁 春郷

上十七句略之、志うらう、人の心を、わうさむ

わうさむ、わうさむ、あひを、あひまう

こひさあし、あつかひ、あつかひ

あつかひ、あつかひ、やまやま、云て下六句略之上下皆單句也

これらの如く此内を一ついは、右行を、百千里家ハありと、あ





さうのりや。山さうや。山さうみの。さうき園也。  
秋の表や。河さうや。河さうみの。はちさうき。

かやうに互ふ阿ひ應して一句も詛語で凡實語虚語その下を  
はふ到るまで。一も一も違を以左右正志くそらくてあみしめ  
くはてふをばの下け言の撰けるもあふき其墨對ともの卒の句  
より次へいひ送る時のことおてそれし古た世の歌ハ。猶お並  
ふか多くして。凡て皆いとわてそらに正しき物に  
そありき。此送り詞の多ハ。次條によく論をへしかつてこそ。歌  
に歌もさうへとも云へそりたあれ。凡そ此等の多ハ恒に誰も  
よく心得るなり。ちしてふ。あやと。然か心得るなせる人の歌  
を思ふ。猶向く偏垂<sup>カハカサ</sup>れと多けれハ上卷の歌ともおて明可な志  
くはるもさありと。更にかくハ可成並へて。かきくこや  
わふさり。あめふふ今の世に人の心も。はさ。正志き物と  
はゆりいさうけて。さうわのかり。の空よハめふて。そのせも

有へく。又ある也。近來の大人もちれ歌とりけ。みきりかり。死對  
命さるを。聞あらし也。あらし。てのせかもあふもあふ。へまれハ。例の  
けふけふたわを。其大人もちれ歌の中おも。既に人とのと  
ろいとゆるさ。歌さるの句を。か。かつ。抽出直。残くはへて其  
也か。をし。知れへ。

七丁 真測  
百子やう。木さきさるは  
木枝をさ。人さうや。

やあ。こさ。  
ほつ枝をさ。多居か。  
さう枝をさ。人さうや。ヤあ。人さうや。

同丁 同  
年こそや。鼻繩さくれ

馬白物 櫃びんつつけけ

やちああらららら

鼻はなををぬぬぐぐ

口くちををぬぬぐぐ

十六丁 同

ああらららららら

ああらららららら

ととらららら

ああらららららら

ああらららららら

九十七丁 同

ああらららららら

ああらららららら

ああらららららら

ああらららららら

五十二丁 官長

ああらららららら

ああらららららら

ああらららららら

ああらららららら

ああらららららら

ああらららららら

ああらららららら

ああらららららら

五十五丁 久老

ああらららららら

ああらららららら

ああらららららら

ああらららららら

まの技 *ma no waza* [まのわざ]

二十九丁 同

まの技 *ma no waza*

まの技 *ma no waza*

まの技 *ma no waza*

まの技 *ma no waza*

まの技 *ma no waza*

百六丁 手藁

手藁 *te gura*

手藁 *te gura*

手藁 *te gura*

手藁 *te gura*

手藁 *te gura*

百五丁

春海

春海 *harumi*

春海 *harumi*

春海 *harumi*

春海 *harumi*

春海 *harumi*

三十二丁 土満

土満 *tsu mi*

土満 *tsu mi*

土満 *tsu mi*

土満 *tsu mi*

先づにわつかふ出ま。これら皆得意の歌ふして中にもさう  
と見えしる對白たふ猶ひひめておはは。かくのこや。是にまに  
らして。近世の大人もたふま。て白調乃みしりある事を。ま



河をわき 河をわき 河をわき

かく左右正志く相並へてはははもき下つてきんは  
可妨今もあつし家をめを背きていへる今世の歌は常あ  
丸そ古規るゝに然りつけいさゝ所を非きてつけいさ  
はるあはて又

七十三丁 真淵

千歳 ちんざい  
あひそやの ちんざい  
あきひこの ちんざい

十丁 千薩

國 くに  
あきひこの ちんざい  
あひそやの ちんざい

百十三丁 春海

あきひこの ちんざい  
あひそやの ちんざい  
あきひこの ちんざい

かやうんむらふ對せぬいひくく常多りり下つてきあ

あきひこの ちんざい

あきひこの ちんざい

あきひこの ちんざい

あきひこの ちんざい

あきひこの ちんざい

あきひこの ちんざい

あきひこの ちんざい

如此先つ正しく墨句をまね對句にるやお並ふ句をすきはて  
さて其次にききつる句あて切り續々いすゝこそ上つ代の  
格ふそありなれ又

三十二丁 土満

あきひこの ちんざい  
あきひこの ちんざい

あまのこころ　　あまのこころ　　あまのこころ

是れ對するに　かたがは　あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ

あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ

かくさきに　いし　時を　あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ

百丁　真淵

あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ

あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ

あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ

あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ

あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ

あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ

あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ

あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ

あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ

あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ

あまのこころ　あまのこころ　あまのこころ

百四丁　千蔭

下廿一



かたはら けしきも 花吹雪も 色も 空も  
けすみの 鳥のかげも 火の 土も 草も 花も  
かすゆはら 人も 花も 鳥も 空も 草も 花も

百二丁 千蔭

心をけらふ 心の 心を 心を 心を 心を 心を  
心をけらふ 心を 心を 心を 心を 心を 心を  
心をけらふ 心を 心を 心を 心を 心を 心を

是ら其對の長よのこあらは向くおのくおをばまきてあひ應せ  
ぬ所のこあらをかくての對句と心得られらるゝや既に上巻よ  
ふいひつゝこやく四句の對をよめは歌の紀記中より例を

く萬葉集中あり六七首あるをたれどそきよく變格の爲けり  
て通例乃歌をも見え變格け為と長よ歌ふや或ハ一句並  
二句並ぶとの短き疊對のみ多し時けあやにけくもあや又或ハ  
聯疊變疊ふとつゝよて句拍子けれてあやけりけりなりて  
とけりたる時の變轉け為ふけり類をいふ是らなら其句並けあ  
やにけりありけり其對けりたるも必皆るはちとあり其  
はま

いけしに	おのこも	玉藻のそ	しほの	おのこ
うちけり	おのこも	川原のそ	かたはら	おのこ
あこそな	あこそな	ゆきのそ	あこそな	あこそな
あこそな	あこそな	あこそな	あこそな	あこそな
あこそな	あこそな	あこそな	あこそな	あこそな
あこそな	あこそな	あこそな	あこそな	あこそな
あこそな	あこそな	あこそな	あこそな	あこそな
あこそな	あこそな	あこそな	あこそな	あこそな
あこそな	あこそな	あこそな	あこそな	あこそな
あこそな	あこそな	あこそな	あこそな	あこそな



あしき。人のきこ。そけい。みづのけし。

大まかにかくさすに。句毎に疊對し。句毎に隔疊をて其調へ程拍子  
おく。いづれある事猶二句疊對ふかける所あり。然はふ今世の人  
いふやうに同一言を左右にわつち上下よりうけてあやうに方  
にき心を。と疊句のつゝ。文雅ひきする物と。ちきを偶に萬  
葉めかきもとて。他物を取合せて長對の。さあかればゆくり  
き。歌うら。いやと。ち。あ。わ。く。其。あ。る。意。さ。ん。議。論。ふ。お。つ  
め。れ。ま。上。の。さ。ち。へ。何。き。あ。ら。う。あ。ら。う。あ。ら。う。中。に。此。一  
あ。い。殊。に。今。の。人。の。心。の。如。く。ま。あ。ら。う。あ。ら。う。あ。ら。う。あ。ら。う。  
今。少。く。採。出。て。さ。あ。ら。う。

二十二丁 常母

あしき。人のきこ。そけい。みづのけし。

あしき。人のきこ。そけい。みづのけし。

四十九丁 千蔭

あしき。人のきこ。そけい。みづのけし。

百四丁 春海

あしき。人のきこ。そけい。みづのけし。

百十三丁 同

あしき。人のきこ。そけい。みづのけし。

百十丁 宣長

あしき。人のきこ。そけい。みづのけし。

あきあきの ちかちか かくかく ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか

四十一丁 春海

あきあきの ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか

あきあきの ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか

七十五丁 土浦

あきあきの ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか

あきあきの ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか

六十四丁 春海

あきあきの ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか

あきあきの ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか

あきあきの ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか

あきあきの ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか

此類乃句つたを既引から人の聯句を云りのありけり  
志くはくふはりけりいりけり古言字の名を得たる大  
人つたけこの古へハ字はもして漢文の中あもわたり  
世の長對を志登はさる對を長くとり時を文議して野ふ  
おけあや彼土の人をけりりけりやうけりけり適萬葉五  
巻ふ出たる憶良大夫の歌を引出て又いもむやすへそれともか  
けり上にいへる章段の格ありて對句にハありけりその對句ハ右  
の如く長句にけりけり右行左行別物をとり合せて右ハ左  
に應へ左ハ右に應へりやうけりけりけり聯疊も隔疊ふけり  
は事あり又其章句の間に疊對のりありけりけりけり彼章段  
や云ハ既ハ舉たる言とまの如くやうけりけり左右對けり方ふり  
拘らけり或ハ右左互に聯疊とあり或ハ隔疊とあり又或ハ其章句

此間に疊對ふとい入す。至て二段あるも三四段れり。始のく  
 一段毎に句格正志く備ふる。是其けらめありか。可。終ハ彼章  
 段の中にたましく二段ふとらへ。是奇の上の一段と下の一段を  
 相對せるやられ句の辨るもある。可。始のつらうして  
 可。猶對ふ。されふちあらし。只物二つ相  
 向ふ可故也。此意味也。上條に擧げ  
 ば歌とるをよんかうしては。かの萬葉卷五に

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

此二句枕詞格

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

ささやうか

已上一段廿八句中一句對。二句對。四句對

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

すさうか

已上二段廿八句中一句疊。二句對。三條。置句二句。

さて彼長對と章段々の差別ある事上卷あり章段乃條下八千予  
 神御歌又藤原御井歌まとい合せて知へし但し彼條の歌より  
 藤原隔疊等いらくふれハ此五卷のるハいらく劣るハはち既  
 小云如く奈良朝とありてそ歌の衰へたるありし是をり  
 中長歌の風調向格ハ只々上古に正しく雅きは方に就て學ぶ  
 ふ然るも上の歌ちくもいへる如し又近世乃歌ハ  
 かの長歌對句を合せて一方句數の足はさるも多く足ゆこそ  
 此對のありけり長かき事いふ合さば忘きて然るもやあり  
 心心得ぬもさあり

百丁 千蔭 此哥對 右行六句 左行四句

みづの 河原のさね かくのの 藤原の歌 歌のあり  
 藤原の歌 かくのの 藤原の歌 歌のあり  
 藤原の歌 かくのの 藤原の歌 歌のあり  
 藤原の歌 かくのの 藤原の歌 歌のあり

何れぞよ 天をゆく云  
 一句不足

四十二丁 同 此哥右行四句 左行六句

枯くく 射さぬ 矢の如く 一句不足  
 枯くく 射さぬ 矢の如く 一句不足  
 枯くく 射さぬ 矢の如く 一句不足

九丁 同 此哥右行八句 左行四句

藤原の歌 一句不足 一句不足 一句不足  
 藤原の歌 一句不足 一句不足 一句不足  
 藤原の歌 一句不足 一句不足 一句不足

ちる花を ことわらぬ  
 一句不足

三十六丁 春海 此哥長對 右行六句 左行十二句  
 藤原の歌 一句不足 一句不足 一句不足  
 藤原の歌 一句不足 一句不足 一句不足

てゝの夜の つつふあれと 秋をまきけ しの息を ちるあふ うちふふあひ  
こゝろいこゝろ たくしあれと ちるあふ 一句不具 一句不具 人よりいふ  
おのゝの ちるあふ ちるあふ ちるあふ 月よりや 人よりいふ  
九十一丁 宣長 此奇對 右行六句 左行四句

一句不具 秋の夜は ちるあふに ちるあふ 一句不具  
此外三丁に 右行十句 左行八句 有るも有 又四丁も 右行十二句 左  
行十四句 有るも不具 又此人も ちるあふ 一人の歌と ちるあふ  
ちるあふとれと ちるあふ大形を知す ちるあふ 事且言れ ちるあふ  
ちるあふに 省れつ 凡そかゝるも ちるあふ 古へも例ありや ちるあふ  
はて又此類も 七言の句より ちるあふ 顛倒に 七五七五と對せ  
るも 多く不具 ちるあふ 二句對れるも ちるあふ 拙く 閑ゆる ちるあふ

志て其長れをや

七丁 真淵 上七言 下五言  
こや少く ちるあふ ちるあふ  
ちるあふ ちるあふ ちるあふ ちるあふ

八十五丁 宣長 上七言 下五言  
松の葉乃 ちるあふ ちるあふ ちるあふ ちるあふ  
ちるあふ ちるあふ ちるあふ ちるあふ

百廿六丁 真淵 上七言 下五言  
ちるあふ ちるあふ ちるあふ ちるあふ  
ちるあふ ちるあふ ちるあふ ちるあふ

此類も ちるあふ 人の ちるあふ 常とれと ちるあふ 五七の つとを 始て



しつとてき ちかきまゝに

いれあひ せしむるに

さつち乃

さちあふそ ちたあひ ちかきまゝに ちかきまゝに ち代まゝに

百けいふ ちかきまゝに ちかきまゝに

酒樽あふ ちかきまゝに ちかきまゝに

ちかきまゝに ちかきまゝに

ちかきまゝに ちかきまゝに ちかきまゝに ちかきまゝに

此歌の句格あやちたすてりし一はかまひしを彼老翁あつて  
誰かつくすてきつとあへも然押さふし古くよきかきまゝに  
此のほかへに協さるぬりまれの折こころはしつてあふし  
さかつて心ゆつぬ所のすらけらふ。あふれ先はしめは二聯

の曼句は所に前後皆山とつきて只一句くも志はねちとある  
玉の瑾と云へ。又次玉此家の云々といへる。今一章たるはまた  
つ弓と云言をとりいてき。初のふせく山卒句のちとせりは  
山れどの句にそむて。ち此さつ弓を助けていさ。末にいさ  
いさへに聞ゆ。今上つ代の歌の句格を以てこれを改め正さハ  
とつ毛やのちかきまゝに

ちかきまゝに ちかきまゝに ちかきまゝに ちかきまゝに  
ちかきまゝに ちかきまゝに ちかきまゝに ちかきまゝに  
ちかきまゝに ちかきまゝに ちかきまゝに ちかきまゝに  
ちかきまゝに ちかきまゝに ちかきまゝに ちかきまゝに

とやうにつとて中間のほよ言を呼出させ卒句ふして母の命

みちのせりの山と首尾をよめしむる句のくさ下殊に  
あつてきかぬわくく又

九十九丁

ひなごのり

あつてきかぬわくく又

あつてきかぬわくく又

あつてきかぬわくく又

あつてきかぬわくく又

あつてきかぬわくく又

あつてきかぬわくく又

あつてきかぬわくく又

あつてきかぬわくく又

あつてきかぬわくく又

あつてきかぬわくく又

あつてきかぬわくく又

あつてきかぬわくく又

あつてきかぬわくく又

あつてきかぬわくく又

あつてきかぬわくく又

あつてきかぬわくく又

あつてきかぬわくく又

あつてきかぬわくく又

あつてきかぬわくく又

あつてきかぬわくく又





はまて

百一丁

ふらふら ちかちか

都へう ちかちか

そのまはに ちかちか

その花に 都へゆく おのつゝ みるはまの ちかちか

あまのりし 喜のゆき ちかちか

さく花も うつらうのち ちかちか 花はのちの ちかちか

たふぬりて けいこきて 花の柱の ちかちか 花はあふみ ちかちか

此歌つゝけりは ちかちか ちかちか 対句とちかちか ちかちか 違ふありて ちかちか ちかちか 例の正とちかちか

東ふり ちかちか

都へり ちかちか

《そのまに ちかちか》

《その花の 都へゆくや ちかちか》

喜のゆき

喜のゆき ちかちか

喜のゆき ちかちか

はるかちか

ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか

ちかちか ちかちか

かやうに云へた凡彼老翁のうゝ中にてみ得られしや ちかちか ちかちか 上條に出る 吉野山の歌 ちかちか 彼ハかの顛倒の對句 又片違の對句と ちかちか ちかちか



海も合せてもさるべきか。其の事一子等ハた。一旦の  
すきい。う。な。れ。ゆ。て。その程を。か。ら。し。事。と。お。り。し。程。に。て。  
は。れ。ま。れ。も。う。せ。ら。れ。年。有。る。す。は。お。の。れ。く。学。せ。も。た。て。  
後。ふ。立。う。へ。り。也。れ。ハ。何。を。か。や。む。く。つ。も。聞。あ。され。人。情。も。  
入。か。て。れ。也。え。て。た。く。古。古。の。は。ま。き。き。し。は。ま。あ。ふ。わ。れ。か。ら。取。  
と。く。あ。り。あ。て。死。て。多。く。ハ。棄。ま。し。又。後。ふ。直。し。改。め。た。も。こ。れ。の。  
色。也。ゆ。其。ハ。遠。か。う。す。え。ら。ひ。こ。あ。く。八。十。浦。玉。を。い。ふ。書。も。を。り。  
く。こ。ち。く。あ。き。も。ほ。し。ま。た。り。し。を。そ。れ。も。近。比。上。木。せ。も。取。也。き。  
を。あ。り。し。死。を。皆。削。り。拵。る。あ。と。を。き。て。も。後。悔。の。程。を。あ。ら。  
れ。は。其。中。也。既。も。い。い。し。と。や。く。揖。取。魚。彦。荒。木。田。久。老。あ。や。ハ。  
後。て。す。て。か。の。す。く。も。ま。く。も。あ。ら。た。め。は。り。也。と。思。う。て。こ。れ。  
也。と。し。ち。れ。家。集。も。あ。ら。ぬ。の。これ。も。思。ゆ。本。居。宣。長。等。と。も。皆。ま。

て。を。拵。ま。た。て。彼。家。集。の。古。躰。部。を。云。に。直。し。を。加。て。こ。れ。の。色。の。  
せ。う。を。今。そ。れ。う。取。也。る。に。後。ふ。き。く。も。加。筆。せ。ら。れ。猶。枝。葉。の。  
き。枯。木。の。こ。ち。し。て。色。も。あ。ら。せ。も。あ。ら。か。く。て。も。言。葉。花。と。く。春。  
に。お。く。れ。の。も。あ。ら。は。人。情。も。そ。を。事。を。そ。つ。か。ら。め。う。く。て。  
か。れ。義。う。せ。ら。れ。て。十。や。せ。お。し。り。の。後。その。門。人。の。歌。と。り。れ。俄。に。  
近。躰。も。あ。り。し。ハ。あ。ま。ま。め。と。く。し。う。い。れ。し。と。い。ふ。あ。ら。せ。と。  
の。歎。々。も。あ。ら。せ。り。あ。れ。と。こ。ち。か。の。一。旦。は。す。り。言。に。い。く。と。  
手。ろ。う。ち。て。お。ら。せ。れ。つ。き。し。故。も。あ。ら。ら。し。山。た。ら。に。衣。刺。き。て。  
もう。筵。の。靡。く。ふ。お。侍。や。か。笑。ふ。堪。は。ら。事。や。ま。あ。り。そ。ん。く。も。死。  
程。乃。中。も。み。こ。そ。め。を。ま。か。し。れ。ま。れ。あ。き。や。お。り。ひ。の。あ。れ。を。け。か。  
等。と。て。及。せ。あ。き。高。ぬ。の。岩。か。ね。ふ。と。こ。も。あ。ら。ら。し。お。つ。き。ハ。お。つ。と。  
て。あ。り。や。の。岩。底。ま。て。ま。ら。し。墮。た。し。是。お。の。り。早。う。ん。行。ぬ。へ。き。道。

さかへりてはちあやまらぬやうにいつくふあうへはきて  
時代の然らざるかゝるあるものを時運に背れて歌のありふ  
かふはんやうの學問やきこふ所のあつそかゝるう  
も部今其時運に背つれば後世も随ふたり後すこと古へふ  
ををうまうの得べき秘傳をやまへ授くへいそめくいつれの詞  
も実語ハ古語ほど高くみやうれきこくえ上古にあつて  
憚りに取用ふへい又虚語ハ時の再んせありてりふしそめ  
てきうりえんこと此業もそのかはる時うつして後ハいつくた  
ればやめられてちくつとく再うとまへきもまかきハそれら  
ハ時のよろしだふちうひて取捨あつへい実語やハ既もか  
はくいつく如く體あるものよりちて形ちあへとも目に思え  
指にちいふ物のつねをいひ虚語とち體もあく目ふも思え

以指ふるさうれきこくの辞をいふ此分ちともち短歌授格ハ  
例を出して詳くわいたためたよつとて虚語ハ時のよろしきよ  
きと云きこくへい思らくしよいぬやくあれこそちうりそめ  
やもの類ハ更にもいかに假初の助辞ハ中あそ古今集あとの間  
なれしる方にあつてあもちなむとよむへいそめハてんとる  
もへいかもハかぬとよむそなればは枝葉のいひあへてう  
たの新古を分つとぬりよちまへちき心くせあを上つ代の高  
知めてこそ本意をりやうてかの奈良の葉の古く枯木も更に  
みはくち若枝をわつしうあそいれふい葉をめくち露の  
玉ふちせて梢高き花を咲せあんこそ今世はさうとる古風  
やいひよへんれ

文政二年三月

守部艸

明治十六年三月三十一日買受

椎本文庫藏版

故楊中毅乃大人を涼くいひて、  
 是は、  
 故てふと六半を、  
 能く、  
 保く、  
 志、  
 此、  
 ち、  
 免、  
 こと



近來紙價非常ノ騰貴ノミナラス諸工費相増候ニ付本社出版書籍右ノ通改正致候割引ハ一時購求金五圓未満割引  
●五圓以上拾圓未満二割引●拾圓以上三割引但シ前金ニ非サレハ送本セス且又郵便稅ハ小包ノ方便利ナル場合ニ  
ハ小包ニテ送本シ餘金ハ郵便切手ニテ返附ス●明治三十一年以前ノ定價ハ取消候也

○本社 明治歌林

每月一回廿一日發行

本集ハ高尚温雅ヲ主トシ長歌●擬律長歌(長歌講修ノ爲一體ヲ設)●短歌●旋頭歌●今樣歌●文章等ヲ研究スル爲  
明治十三年以來諸門人諸雅友ト同盟シテ月々發行スルノ書ナリ歌文ニ志アル者ハ地ノ遠近ト學ノ廣狹トヲ論セス  
加盟研究スヘシ但シ郵券送附次第明治歌林規約書ト一ヶ年ノ課題トヲ呈ス

○本社 教授規定

社長 橘道守 謹啓

歌ハ心に思ふ事をいひ出るものなれば誰にもよまるゝ也されど入立あしければ幾年よみても上達はしかたきもの  
也されど教へ方によりては思の外速成するもの也されは入方こそ大切なれ先づ歌よまんには本社出版の心の種三  
冊を能く見て歌よむへき諸般の心得を悟り歌題虛字詠格●和歌作例下蔭集六冊●明治歌集(自初編至九編廿八冊)  
を机上に備へよみ習ふへし●助辭本義一覽二冊●互仁乎波童訓三冊●短歌撰格長歌撰格文章撰格等熟覽すれば無  
上至極の界に達すへし

一通學入門束修金壹圓月謝壹圓 通學は二七の稽古日に來修する者  
一通信入門束修金壹圓月謝半圓 通信は郵便又は他の便にて添削を乞者  
○稽古定日 毎月二、七、月並歌會十二日 但シ會日各評詠草景品の餘興あり  
○數よみ會 毎月一回 午前十時開會 午後四時散會

製本版元 橘道守

東京本所小泉町二十九番地

發兌 東京日本橋區通一町目 須原屋茂兵衛  
同・同上 大倉孫兵衛

書林 同 通三町目 小林新兵衛  
同 京橋區南傳馬町 吉川半七  
同 淺草區北東仲町 淺倉屋久兵衛



